

強度行動障害を示す人の地域生活の取り組みについて考える

荒川 哲郎*・西野 貴善**・野村 省吾**・林 淑美**

“A Support Program for People with Extreme Behavioral Disorders Living in A Community”

Tetsuro ARAKAWA, Takayoshi NISHINO, Shougo NOMURA and Toshimi HAYASHI

1. はじめに

互いに対等に人間として繋がり合うこと

「人を叩き、嘔み、傷つけること」の他害行為をする人との繋がりを作る時、何を考えるか。「私を傷つけてくる人」との関係は憎しみの感情が生まれ、さらに私自身への防衛機能が働き、自分を守るために、他害行為をする人と敵対関係になることを予想する。さらに、力関係を利用して、その人を遠くへ離したり、時には、「その人を閉鎖された空間へ閉じ込める」こともする可能性もある。「私を傷つけてくる人」を特別な人として、その人の気持ちを遠ざけてしまうのではないだろうか。しかし、このように考えている私へ疑問を持ち、私自身の生き方を考えなおすことになる。

私の疑問は「私を傷つけてる人も、私と同じ様に生きている人間である。つながりをつくれないうだろうか。まず何を知ることから始めるのか。人間同士として、その人と向き合いきれるためには、どのようにつながっていくのか。」

これらの疑問を考えるなかで、「他害を示す人たちと地域で共に暮らしたい。」と向き合っている人たちに出会いました。「どのようなことが自分たちは、できるだろうか。」と、模索しながらも、一人ひとりの気持ちをつかもうとしている姿がありました。

東大阪市の社会福祉法人 創思苑のスタッフの西野貴善は「強度行動障害」、他害をする人と対等な人間関係をつくり、どのようにつながるのかを考えている一人です。

彼のとらえ方は「ただ単に叩くという行為だけに着目していると、なかなか関係性も築けないし、どうしてこうかと迷うことになる。」「もう少し大きな視点で、叩くこともあるが、違うところもあるという見方をする」さらに「また違った部分がみえてくる。結果

として、落ち着ける時間が増えたり、落ち着ける環境ができていった。」と、体験を振り返る。人間の多様な生きている様を様々な角度から見ようとしている。向き合おうとしている。

「様々な攻撃を受けながらも、敵視しないで、対等な人間関係をつくり、長い間の付き合いをどのようにしているのだろうか。」と、新たな疑問が生まれる。

西野貴善は「加害者にさせない、被害者にさせない」というのを彼はすごく大事にしている。「叩かれるとこちらの感情もすごく揺さぶられるので、叩かれない距離感であったり、パニックになった時に叩かれないようなアプローチのしかたをすごく工夫をしている。」と、叩かれることで感情が生まれ、敵対関係になる循環を避けて、人間関係を続けていることを話す。

また、東大阪市の社会福祉法人 創思苑のスタッフの野村省吾は「強度行動障害」の人たちとのつながりの経験を基に「「こういう思い」「こういう理由」があるから、その行動をする理由がある。関係性を築く中で、理由を考えることで、すぐ止めるのではなくて、その人を理解できるようになるのではないかと、基本的な人間としてのとらえ方を語られた。自分を傷つけてくる理由を考えて、その人の気持ちを深く考えようとする態度に驚いた。

そして、彼らはどのようなことを続けているのかとの探求心が生まれた。このような背景を伝えながら、三重県で、実践している人たちとの話し合いを記録化した。

基本的には、「障がい」があっても困っている人と付き合い合うようなスタンスではなくて、お互い人間同士として、どのように付き合いを深め続けるかを考えてみる。

*三重大学

**社会福祉法人 創思苑

2. 研究の経緯

東大阪の社会福祉法人 創思苑の実践の紹介

長期に施設で生活を続けていた大川誠さんと大深克博さんの2人を地域で生活を継続するための取り組みを継続している。以下に2人の紹介をする。

大川誠さん（44歳・男性）の紹介

施設から地域移行時の引継ぎ資料

施設生活暦 24年

重度の知的障害、言語によるコミュニケーションは困難

水遊び、便塗りのこだわり

外への飛び出し、危険回避は困難

盗食を含む食事への強いこだわり等

生育歴

東大阪で生まれ、育ち、12歳まで、東大阪市の小学校へ通っていた。母親が亡くなり、Sセンターへ入所。強度行動障害と診断。地域移行の対象者となり、施設と社会福祉法人 創思苑で連携・協力体制をつくり、プロジェクト会議を継続し開催した。会議で決められた方針に基づいて、グループホームでの宿泊体験、創思苑パンジーでの作業、食事などの生活体験を重ねた。

地域で生活を継続するための取り組みの内容等

1. 創思苑パンジーでの体験初日、ショートステイの部屋で過ごしていた大川さんがいない。「いない。どうしよう」と、慌てて、近くのコンビニへ行くと、大川さんが大好きなチョコレートとパンを正座して食べていた。コンビニの店員さんは「入ってきたと思ったら、急に棚の前で正座してパンやチョコレートを食べ始めた時はびっくりしたけど、いつもパンジーの人が来てくれているし、きっとすぐ職員の人に来ると思っていたよ」との言葉に「すみません」との思いと大川さんが外へ出ていくことは大切なことと考えた。施設からの情報では、コンビニエンスストアに一人で入って、商品を棚から、なぎ倒すことを聞いていた。マナーよく、正座している姿に「なんでやねん」と突っ込みそうになった。

2. その後、大川さんが出ていかにないように考えるのではなく、なぜ出ていくのか。どうすれば、無断で出ていかにようにするのかを考えた。最初、コンビニへ行く時は、職員3人が大川さんの手を持ち、付き添った。本人が混乱しないように買うものの写真カードを提示した。しかし、大川さんは写真を見ることはなかった。3人の職員が手を持ち、買い物を終えた。大川さんは買い物した袋を握りしめ、グループホームへ帰った。

その後、徐々に付き添いの職員の数を減らすことに

なっていた。大川さんは経験を積むことで、見通しが持てるようになった。2年後には、職員1人での対応で、互いに安心して買い物ができるようになった。

大深克博さん（44歳・男性）

施設から地域移行時の引継ぎ資料

施設生活暦 19年10か月

療育手帳A、言語によるコミュニケーションは困難
高校より支援学校へ入学

自宅4階から物を投げ捨てる。窓越しに隣室へ移動。夜中に外出。お金に執着する。

高校1年から精神科投薬を受けて、昼夜の逆転。障害児施設に入所するが、職員への暴力行為、器物破損行為がみられ、平成8年、施設を移動する。

飲水にこだわり、昼夜での体重差が5-7kg、多い時は10kgを超える。

地域で生活を継続するための取り組みの内容等

飲水行為は実家ではないために、「本人が飲みたくて飲んでいるのではない」と考え、別の楽しみがあると多量の飲水がなくなると考え、トイレの後はお茶を飲んでもらうようにしたら、飲水行為は軽減した。パニックになる前兆がわかったので、電気、テレビのスイッチを動かし始めると、職員からの話しかけをしたり、頓服の服用をする。頭を壁にぶつける時は、仰向けになってもらい、職員の膝で頭を支えるなどを行っている。

パニックになる前に職員へ発信してもらって関係構築、安心して、生活するようになってきている。

金銭を盗むことがあった時は職員と数時間にわたり、話し合い、問題の解決をする。

守るべきルールの徹底した話し合いを続けている。

毎日、少額のお金を渡し、飲食に使っている。お金の使い方は自分で選び、決めている。

3. 「強度行動障害を示す人の地域生活の取り組みについて」の話し合いの記録

2017年1月24日に三重大学において、「強度行動障害を示す人の地域生活の取り組みについて」東大阪の社会福祉法人の創思苑パンジーと三重県の福祉NPOの職員との話し合いがされた。

話し合いの構成メンバー

東大阪 社会福祉法人 創思苑

ザ・ハート：チーフ 西野 貴善

パンジーⅠ：サブリーダー 野村 省吾

三重県鈴鹿市

自立生活センター アーチ 畠中 忠

三重県津市久居

合同会社 おうとばいとうり 大東 悠二

三重県鈴鹿市

居宅介護事業所 そらまめ 江藤 真理

三重県津市

居宅介護事業所 スマイル 川北 啓子

話し合いの記録の編集（話の流れを分かり易くするために、話し合いの中で話のテーマを任意につけて、読者へ話し合いの内容の手がかりを提供しました。）

1. 「思い」「理由」があるから行動をおこす。

荒川 基本的には、障がいがあって困っている人と付き合うというようなスタンスではなくて、お互い人間同士として、どう付き合うかである。僕らの問題とも関わってくるが、人間お互い付き合いを始める、互いに思うことがいろいろとある。困っているということをマイナスとして捉えられ、「あなた個人のせい」と言われるのは、だんだんとストレスになってくる。その辺のところ自分自身を振り返りながら付き合いをされている。つまり、人にストレスをかけないということを基本にし、お互いに気持ち良く、快適につきあうということをどのように行えばいいのか、この辺をかなり意識してやられているのではないかと。先ほどの話の中でも、冷蔵庫を何回もあけるといのがあったが、「なぜ何回もあけるのか」という聞き方ではなく、「のどが渇いているのかな」とか一緒に気になるものとしている。それは僕らもある。そういう聞き方をするといい。人間関係の根本を問われているのではないかと思う。

西野 この仕事を初めて10年を過ぎるが、はじめから関係性とかその人とどう接しようと思ってきたわけではない。関係性を意識し始めたのは大川さんのときが大きい、少し前を振り返るとそんなに変わっていない。しかし、長いスパンで振り返ってみたときに、「この人ってこんな風が変わってきたな」というのをすごく感じるようになった。3年前と比べると落ち着いてきたとか、こんなことができるようになってきたとか。それが感じられるようになってくると、それが関係性であったりとか、その人の変化っていうのがあり、それは短いスパンでは気づかないが大きなスパンで見ると感じる。その人が変わるという可能性を信じてかわれることで、自分自身のかかわり方も変わってくるだろうし、相手が変わることにもつながるのではないかと。

野村 関係性を築くということも仕事であるが、管理職としてはその関係性を多くの人に気づいてもら

うってというのが仕事になってくる。その点において、気を付けているのが、「こういう思い」「こういう理由」があるから、その行動をするという行動の理由である。支援の方法だけを伝えていると、風化してしまう。関係性を築く中で、理由を考えることで、すぐ止めるのではなくて理解できるようになるのではないかと。

本気は伝わる。相手のことを思って伝えたときは、ちゃんと聞いてくれる。逆に言うとそれしか伝わらない。

荒川 なぜこんなことをするのか、背景を幅広くいろんな観点から考えられているが、個人的なつきあいの限界があるのではないかと。そういったところで、みんな、どういう理由があるのか話し合う機会はあったりするのか。

野村 実際介護に入るのは2名であるが、集まって翌朝ミーティングみたいなのをして報告する。日中にはチーフに相談したり、他の人に聞いたりしていろんな話をする中で、情報がでてきたりする。それを実際に試したりする。介護者は月に1回介護者会議があり、そこで思っていることを話したりし、情報を共有する。

2. 相手がどんな表情をしているのかより、こちら側の必死さで止めてしまっている。

荒川 冷蔵庫を何回もあけるとい行動に、「こだわるものがあるから、何回もあける」という話にハッとさせられた。僕らは、冷蔵庫を何回もあけるといことをやめさせようとするが、そこにはちゃんとこだわる理由があり、それを理解できたといことは人間の気持ちが相互につながったのではないかと。

西野 たまたま冷蔵庫の件ではつながることができたが、やっぱり一人で考えることには限界があって、自分一人ではその人を見て感じることは一通りしかない。その人を知っている職員で見て、行動の理由をいろんな視点で考えることが大切である。ここに10人いれば、それぞれが感じることもあると思うので、関わる人が多いことはプラスになる。

こちらが反応した時に、その人がどんな表情をしているのかというのを、きちんと見ていない。止めるときには止めることを目的としているので、なかなか相手がどんな表情をしているのかより、こちら側の必死さで止めてしまっている。そこに余裕があると、どんな表情をしているのか見ることができる。水の件でもそうであるが、どのような気持ちで水を飲んでいのだろうかという考えに至っていなかった。水を飲んだ後ってどんな顔

をしているのだろうとみんなで話し合った時に、「うれしそうにしていない」「しんどそうな顔をしている」となり、だったらやっぱり止めてあげる支援を考えるべきだろうとなった。こちらが行動した後の相手の表情とかにしっかりと注目していれば、そこから支援の方向や方法につながると思える。

荒川 感情を受けて感情で返そうとされている。言葉とか理屈ではなくて人間の「これは苦しいこと」を一緒に苦しんで、こんな苦しさを本気で変えていこうなみたいな。楽しいことやうれしいことは一緒になってやってみようみたいな、感情レベルでのつながりを大切にされている。

3. まず信じること、変わることができると期待して。

島中 話を聞いて良かったと思うことがある。僕は小さい時、小3くらいに知的障害者と判定されている。びっくりするかもしれない。親がずっと反対をしていて、今は介護の仕事を経営している。

知的障害者の人たちに対して、まず信じてあげること、変わることができるということを大事にしている。この時代で絶対に変わっていきけるってのが良かったと思っている。

知的障害者の施設で20年ほど前に働いていたことがあるが、その時に全然話してくれなかった人がいた。その人がたまたま、虫を見ていたときに無理やりに引っ張っていたことに気づいて、「あ、虫だね」という一言で、顔の表情がぱっと変わって、僕の考え方が変わった。それから関係性が良くなっていき、それでも全然話してくれなかった。が、挨拶だけは続けていた。挨拶だけは、ずっと続けていたら、僕が落ち込んだ時期にぱっと来て、「だいじょうぶ？ だいじょうぶ？」って声かけをしてくれた。それを見せないようにしてきたはずなのに、ちゃんと見ていて考えていることを思い知らされた。そのあと半年後に、名前を呼んでくれるようになり、つきあうようになった。やっぱり、信じること、可能性は必ずある。問題行動を問題行動として見ているのであればチャンスはない。問題行動、変わった行動をとるっていうことは変わるチャンスなんだ、という考え方をすごくされていて、素晴らしいと思う。

荒川 「信じられる」ということは、信じられる方にとっても嬉しいことである。それを敏感に感じている。この人は自分のことを信じてくれている。ピープルファーストでも、いろんな人がまず自分たちのことを信じてくれと言う。信頼関係をつくるのが基本なんだということを常々言われてい

る。信じるということは理屈の世界ではなくて、人間と人間が感じ合っていて、この人は自分のことを信じてくれているということで、うれしくなったり、安心したりする。理屈ではなくて感性の感じるところが、大事である。「信じている」「可能性を信じる」という強い言葉の中に先ほどの話してもらった人たちがいるのではないかと感じる。感じるということは伝わりにくいけど、お互いに感じ合っている。

4. 「加害者にさせない、被害者にさせない」

島中 実務的な話になるが強度行動障害になると、嘔んだりとか、怪我をしたりが避けられない部分がある。その際の職員の対応、どうフォローアップされているのかについてお聞きしたい。

西野 強度行動障害という他害のある人に対してどう支援しているのかだと思うが、「加害者にさせない、被害者にさせない」というのをすごく大事にしている。叩くことをよしとは思っていないし、叩かれるとこちらの感情もすごく揺さぶられるので、叩かれない距離感であったり、パニックになった時に叩かれないようなアプローチのしかたをすごく工夫をしている。実際に事業所に机を叩いたり、隣の人に手が出てしまったりとパニックになりやすい人がいるが、そういうときにはちょっと距離を取って関わるようにしている。パニックの状態が常に起こっているわけではないので、穏やかにやり取りできる瞬間がある。その人の場合は、漫画のワンピースが好きなので、パニックになった時でもワンピースの漫画を差し出すと切り替わったりする。あと、普段落ち着いているときにしっかりとコミュニケーションをとるようにしたりしている。それは他の職員にも伝え、支援をしている。

ただ単に叩くという行為だけに着目していると、なかなか関係性も築けないし、行動をどうしているかという話になってしまうが、もう少し大きな視点で、叩くこともあるが、違うところもあるという見方をすることで、また違った部分が見えてくる。結果として落ち着ける時間が増えたり、落ち着ける環境ができていったりにつながると思う。本来であれば、こういった行為でなく伝えられるようになったらとは考えているが、なかなか変わらない。でも、いつかは変わるのではないかと信じている。その方とは10年ほど前から付き合い合っているが、10年前と比べると今の方が落ち着いている。パニックとか起きた時には変わっていることを感じる。

西野 実際に現場に入っていて、忙しくなったりして、

自分に余裕がなくなってくると、相手のことを思いやる余裕もなくなる。信じられなくなる。そういう意味では、自分自身がいかに余裕を持っているか、余裕を持つためにはどうするのか、が必要なことだと感じる。信じると言うがなかなか言葉だけでは信じられるものではないため、環境面でもどう作っていけるかは大事だと思う。

5. 意味もなく落ち着かせようとする、だからぶつかる。

畠中 やっぱり浮き沈みがどうしてもある。「この人にはこういう可能性がある」と言われて、盛り上がっている人もいれば、「そんなことできない」と思っている人もいっぱいいる。そういうとき、落ち込んでいる人に説明できるっていうのが組織の中でできていくと、あまりへこまずにできていくのではないか。

一時期、3人（江藤、畠中、大東）で強度行動障害に取り組んだことがあった。まだまだ三重県の中では強度行動障害っていうものは問題行動であり、問題のある人として捉えられている。問題を減らそうという部分大きいけど、そうではなく、共に暮らすにはどうしたらいいのかを話し合ってきてはいたが、やはり落ち着かせようとする。落ち着きたい時に落ち着かせようではなくて、意味もなく落ち着かせようとする。だからぶつかってうまくいかなかった。

西野 大川さんの場合、2年半をかけて移行している。

「やってみよう、いってみよう」で始めると受けた方がすごくしんどくて、その人のことをよくわからないままに受けなければならぬ。その人にとってもしんどい状況だし、受ける側にとってもしんどい状況だったと思う。2年半という月日をかけて、スモールステップで日中体験の泊りから少しずつ増やしていった。そうすることで、見ている側も「これなら受け入れられる」という状況になる。受け入れられるようになる段階までもっていくのが大事だったと思う。

強度行動障害を示す方で、精神科の病院を転々としている人がいる。保護室に今いるが、そこからの地域移行ができないか東大阪で話している。保護室から地域はあまりにも環境が変わりすぎる。かつ、病院という場所は退院をさせる場所なので、施設と違って地域に移るためのサポートがやりにくい。その方の場合、どこかの施設に一度入所してそこから地域へという取り組みを考えている。なかなか難しく、入所施設が困難な人を最近受け入れてくれないので、次に

移れない。そこでも難しさを感じている。

西野 大川さんの場合は、施設からの提案ということで移行を進めていったので、施設もすごく協力してくれた。なかなかそういった協力を得られる法人や施設は少ないので、そういう社会も含めてアプローチして行って、誰もが地域で、というのにどうつなげていけるのか考えている。

6. 強度行動障害を示していることは最大のSOS。

大東 強度行動障害を示しているというのが本人の出している最大のSOSだと思うが、そこに至るまでに、普段のコミュニケーションがうまくいかず、普段のSOSが出せないが、故に最終的に大きなSOSとして強度行動障害を示しているのではないかと、思う。普段のコミュニケーションを表情だけであたりとかの感性的な部分だけでやりとりをすると、できる職員とできない職員が出てしまう。人に頼るといって、この人だったら落ち着くが、この人だったら落ち着かない、といったことは本人にとってすごく生きにくいのではないかと、思う。

運営する側としても人を育てていくのがすごく難しいのではないかと、思うが、本人から表出するようなコミュニケーションの仕方、スケジュールや職員の言っていることを理解するだけではなく、本人から何かを発するような支援の方法やコミュニケーションの支援・工夫があれば是非教えてほしい。

7. コミュニケーションがうまくとれていれば自傷や他害が起こらなくて済んだ。

野村 大川さんの場合、何年もつきあっているが、自分から言ってくるということは、知的レベルも重度な方なので、難しいところがある。やはり表情が読み取れず、コミュニケーションに失敗し、コミュニケーションがうまくとれていれば自傷や他害が起こらなくて済んだのに、起こってしまったケースはいっぱい体験している。ずっと入所施設だったので、人を見るという経験をしてこなかったために人に目を向けるのが苦手であった。つきあっていくなかで、こちらが蓄えている引き出しで気づけるヒントはあると思う。新しい人は、関係性がないので一からスタートしてもらわなければならない。「この人はこういう人なので、こういう風にしてください」といった情報を伝えてはいるが、つきあう中でその人とその人の独自の関係性がある。私の場合、大川さんのスケジュールとか金銭的な管理、支援方針とか決めたりする部分

もあるので、むこうも「決める人」と思っているかもしれない。一方では、「無理が利く人」でもある。こういった逃げ道があってもいいと思う。大きく調子を崩さない限りでは、こういうのがある。

例えば大深さんであれば、何かあった場合に、間に入ってまず聞いた上で、私が入り、ちゃんと話をしてもらって仲直りをしてもらうこともある。これは大深さんがある程度のコミュニケーションがとれる場合である。大川さんのようにとりにくい場合であっても、本当に嫌なことをされたら嫌だったっていうことを伝えてもらうようにしている。逆にしてほしいことを本人がしてしまったら、謝ってもらうことはきっちりしている。そういうところで、ちゃんとやったことに対して、ある程度の結末をつけることで関係性が築けていくのではないかなと思う。

西野 本人から発するコミュニケーションにどう気づいていくのか、ということであるが、まず、新しい人にどう伝えるかが大事になってくる。何時にお風呂、何時にご飯食べるなど、最低限の過ごし方のベースをつくっている。どういう意図でこの支援をしているかという支援の意図を伝えていないと、かたちだけになって結局、心がなくなような支援になってしまうので、どういう意味でやっているのかを伝えるようにしている。あと、新しい人にどう伝えるかという部分では、その人にいきなり任せるのではなく、一緒に入って同じ経験をする中で伝えていく。「このときはこういう意味なんだよ」というのを伝えるようにしている。例えば、手を挙げて何か訴えているのであれば、お茶を求めているのかもしれない、とか。本人はいろんな発信をしているのかもしれないが、読み取る側がちゃんとそれを読み取れるような力をつけていくのが一番早いと思う。読み取る人が増えてくると、本人もわかりやすい表現をしてくれる。お茶を飲むのにすごくこだわりのある人がいて、以前は自分で何でもしなければいけないと思っていて、冷蔵庫まで走って行って、お茶のボトルを空けて飲んでた。「言ってくれたら取るから」と3年くらい伝え続けていたら、今では「あゝあ」と言うようになり、行かなかったらすごく怒るようになった。以前は応えなかったらすぐに行っていたが、だんだん「言ったら出てくるんだ」という経験を積むことによって、コミュニケーションが通じるようになる。自分でしていたから、他のことも気になっていたが、とりあえずそこは任せたらお茶は出てくると思っているので、冷蔵庫の中をぐちゃぐちゃにしたり、大変なことになるの

が少なくなった。そういうことの積み重ねが大切ではないかなと感じている。

江藤 うちも年齢は若いが、大川さんのようなタイプの方を在宅でしている。在宅できているが、自傷行為があったり、意志を伝えるのが難しいと思っている中で、今は安定してきた。

以前は、冷蔵庫が自分の欲しいものがすごくたくさん入っている箱になっていて、自分で取りに行き、ぐちゃぐちゃになっている状態であった。ジェスチャーしたときに即座に対応することを心掛けたら、「ジェスチャーですれば行かなくてもよい」、「ジェスチャーすれば提供される」となった。こちら側にとってもそれはすごくありがたい話ではあるが、意欲の部分では少し葛藤がある。自分で手に入れることのできる力があるのに、動かなくても手に入る。そのどちらがいいのかすごく迷いながら支援をしている。しかし、止められることもないし、ストレスはなくなっている。

支援に関して、新規スタッフの育成について教えてほしい。同行して、支援方法を伝えていくとのことであったが、それは期間を設けているのか。

8. 基本的にグループホームでは、二人体制がとれている。

西野 基本的にグループホームでは、難しい方には二人体制がとれているので、一人は慣れた人で、もう一人は新しい人を組み合わせている。居宅やヘルパーに行く方に関しては、日中に入ってもらうて実習をしてもらったりしている。

畠中 全体で感じたことは、誰もができることなんだと思う。大きく全体を引き上げようとするから難しくなっている。例えば、この人は笑うこと、この人は手を差し伸べること、ということで介助する問題はあるが、どの入り口でも入ろうと思えば入れるのかな、と感じた。

西野 冷蔵庫の話でいう「意欲」の部分について、それを本人がすることでぐちゃぐちゃになってお互いが嫌な思いをするのであれば、今の心地よい環境っていうのをちゃんと提供できればいいのかなと思う。わざわざ大変なところに意欲をもってこなくてもいいのではないかなと思う。本人がこうやって動きたいっていうのが別の形で、周りにとっても無理にならない形でしていけばいいのではないかな。だから、そこは分けた方がいいのかなと感じる。僕が支援するときも、ぐちゃぐちゃになっていて、お互いに嫌な思いをするのであれば、これはこっちでやって、別のことで意欲を出せる方法を考えていくと思う。

そういう整理をすることで新しい人も入りやすくなっていくのではないかと感じる。ただ、「なんでこうしているか」を伝えていかないと、こんなもんだって思ってしまうと可能性がみえなくなってしまう。「こういう理由で、こういう支援をしてきていて、今こうなんだ」という経過を伝えるだけでも、プラスになるのではないかと思う。

実際にうちに新しい介護士の人に来て、グループホームの女性の方を介助してもらう時に、その方の生い立ちからすべてを15分くらいで伝えたことがあった。そうすると、その方の支援で少し困っていたのが、背景を知ることによってその人を理解することにつながり、理解できるとちょっとそういう行動をしたときに、こっちが間を置ける。そういう意味があるのかな、というのを感じられるからよかった、と介護士の方が言っていた。伝えるときには現状だけではなくて、その人の生い立ちや、その人がどう生きてきたかなどを伝え、知ることによって、関わる人が心をもって関わることにつながるのではないかと感じる。また、そういう伝え方をするように意識をしている。

江藤 強度行動障害は自傷があると伝えてしまうと、ヘルパーの中で、最初は距離がみえない分、怖かったりとかも出てくると思う。それが先入観みたいになってしまうのではないかと感じる。最終的に自分が考えているのは、「対人」なので特別な方でもないし、一般の方と変わらないという目線で見たときに、結構受け入れる幅が出てくるのではないかと感じる。それを自分以外のスタッフに伝えるのが難しいなと自分の中で課題になっている。誰もが家族のように思えるとか、あの人だからこうだ、とか向き合う中で知っていったら、もらいたいと思いがながらも、それを伝えるのが難しい。一回、伝えてしまうと怖さがでてしまったりするし、経験を積んでいるスタッフがかかわるとも限らない。学生さんに興味があっても、ふっと入れるような状況でいたいと思っているが、なかなか難しい。何か取り組まれていることがあれば教えてほしい。

西野 強度行動障害の言葉は、その人にレッテルを貼り付けてしまうのであまり好きではない。この人はこういう人だという伝え方をするのがいいのかな、と感じている。きっと伝える時に、支援の大変なことや気を付けることを伝えている。それも大事であるが、いいところも意識して伝えるようにしている。こんなときにこんな表情をする、こんなお茶目な一面もある、とか。大川さんは食べているときにすごくゆったりとして落ち着いている表情をする。グループホームで鍋をすることも

ある。その時、大川さんは待てずに食べ始めると思っていたが、ちゃんと煮えるのを待ってお皿に入れたものを食べていた。目の前で作っているのも、まだ残っているという見通しが立つのかもしれない。マイナス面も伝えるが、プラス面も伝えるようにして、ちょっとでもその人を好きになってもらえるようにしている。

野村 日々、ミーティングをやっていて、報告として一番やりがちなのが、「問題もなく、落ち着いていた」である。その人が問題を起こすというベースがどうしても健常者の中には無意識下にある。そこをそうではなく、「何をどうしていた」や「何をどうして過ごしていた」みたいに言い換えてもらうようにしている。そういうところを根気強く伝えている。今までの社会の中で、無意識のうちに蓄積されてきたものなので、そこは根気よくしている。今、11月に入られた新任の方がいるが、慣れている人に一緒に入ってもらうと、その都度伝えている。まめに。気づいておかしいと思ったことはその都度伝える。あせらないけど、見過ごさないようにしている。

西野 そんなにうまくはやれてない。同じように悩みながらしている。

畠中 話を聞いていて、やっぱりそこを大事にされていると思った。支援する側にも気持ちがあってそれをどう発散させていくのか、というのを大事にされている。一緒に暮らす人であり、その人の可能性をもらうこともあれば、あげることもできるという前提が必ずある。そこに集約されているのではないかと感じた。

喀痰吸引や胃ろうなどの医療的ケアを受け持っており、主に在宅でやっている。そこでも怖さが出てきて、この人は現場では技術的に無理だな、ってこともある。しかし「技術は徐々に覚えればいい、大事どころだけ覚えればいい」と伝えて、その終わった時に、「利用者はどんな顔をしたか」「利用者はどうだったか」と問いかけたりする。すると「今日はこうやって言ってくれた」や「今日はちゃんと痰が吸えた」などと言ってきて、それは次につなげることができる。どれだけいいところをみれて、経営している側がバックアップすることを伝えられるかではないか。難しいと言ってしまう言葉は悪いが、難しいというイメージを抜けさせるように努力できたらと思う。

9. 状況に合わせて人に助けを求めること。

野村 先ほど、自分ですることの意欲の話が出ていたが、たしかに自分でできるっていうことは、日常

生活の ADL のディスアビリティのところでは、自分でものを取ることができる。が、その人がそのものに対してできないことは何かと考えた時に、「その時の状況に合わせて、人に助けを求めることができない」と考えることができる。自分の周りの状況に関係なく、自分でやってしまうってなったときは社会生活に対しての社会的不利になる。ハンディキャップのところという自分でやってしまうっていうのは社会と協調がとれないという不利になってしまう。ただ単に ADL の部分でできるっていうのを考えるだけではなく、社会生活の上でその人のむずかしさっていうのを考えたらヘルプをしてもらうのは大事になってくる。別のところで、意欲を持てることがあるのであれば、そこをみつけてあげればいい。案外、ADL のできるだけを考えがちであるが、トータルで考えたときにハンディキャップのところできないっていうのがある。考え方の転換が必要である。その人がそれをできるのではなくて、人を意識することができないから、やるってことを伝えたりしている。状況に応じた見方、視点の変更、どの方向から見るのが大事ではないか。

畠中 先ほど手を挙げてお茶を要求するという話があったが、すごいことだと思う。可能性を広げるカギだと思う。例えば、全然、知らない人に手を挙げて、わーって言うことが伝わるだけで、その人はコミュニケーションの理解者になる。そういう人がどんどん増えていく方法を伝達していくと、お茶が飲める関係になる。繋がり核となるということでは、確かに自分のことも大切であるが、もっと大きく可能性があるということで、すごいことをされていると思う。

江藤 スモールステップでされているということであったが、その方はすごくファンキーな方で体験も 2、3 回であわてた支援で始まった。なので、手探りの中でああったが、いろいろなことがうまくつながって、わからないことがありながらも、すごくラッキーな状態でスタートすることができた。

入所されていた方なので、意志を言わずに、今まで自分でやらざるを得なかったのか、やらないとやれなかったのか、自分で行動していたことがスタッフに対して、ジェスチャーで伝えるということができた。今までは使いじりとか、始末ができないという問題行動を聞いていたが、ペーパーホルダーを触るしぐさが出てくるようになり、その行動の時は確かに便が出ている。すごくありがたいことであり、喜んでいるが、どこまで手を焼くかが課題である。どこがポイントで、どこが楽

しんでいるところなのか、さじ加減をこちら側が持っていたりするので少し葛藤がある。本人にとっていいと思っても、本当に本人にとってそうなのか、など考える。でも、今は安定しているのを見ると、表情が柔らかくなっていたり、トータルのいいのかなと勝手に解釈をしながら進めている状態である。

西野 きっと今までにいろいろなサインを出してきていたかもしれないが、なかなかそれがやり取りとして成立しなかったりとかで、一個通じたら、これもこれもと広がっていているように感じる。まずは、コミュニケーションを取れることっていうのが、お互いにとって大切なことであり、心地よく生きることにつながると思うので、その部分を大切にしていって先に、きっとまた違うところでの変化とかを感じると思う。それは、入っている人が感じられる部分かと思う。そのことをきちんと話し合っておいたり、お互いがこれでいいか、手を抜かずに確認し続ける。今の状態が良しではなくて、もっといい状態にということとか、もう少しこの人の生活の幅が広がるためにはどうしよう、ってことをずっとし続けないと、現状維持になり、きっと生活も、僕らの感覚も落ちていってしまう。「ちょっとずつでも成長する人達であり、自分たちも変わるし、相手も変わる」という思いをもちながら、可能性を信じてかわるといことは続けていかなければいけない。

畠中 やっぱりコミュニケーションっていうのは、コミュニティの部分であったりするので、いろんな人のコミュニティが増えてくると、その人たちも支援しやすくなる。「居たい場所にいる」、「居たい人という」っていうのをすごく大事にされていて、僕たちも大事にしたい部分だと感じた。大きくなくて、小さいコミュニティがいっぱいできるとすごくいいなあって思う。

西野 いろんなところとつながり始めると、その人が頼れる場所がいっぱい増えていく。入所施設に入ってしまうと、頼る場所がそこしかなくなってしまふので、何かあったときに SOS が出せない。けれども、頼る場所がいっぱいあると、どこかで誰かが SOS を感じ取ってくれるかもしれない。そういう意味では、そういうところが増えていくといいと思う。

畠中 みんな、それを「依存」と言う。けれども、いい依存先である。変わりたいところ、行きたい場所が増えてくること大事だと感じている。それは強度行動障害だけではなくて、僕たちもそうであるし、精神の障がいのある人であっても、関係な

くても人間みんな、そういうコミュニティが増えてくるといい。仕事が嫌になっても、そこへ行くのが気楽でいられる。

10. 依存先は増やした方がいい。地域で暮らすことにつながる。

西野 依存先はきつと増やした方がいい。それがきつと地域で暮らすことにつながると思う。限られた依存先だと、やっぱり SOS が出せない。1カ所しかなければ本当にそこでやるしかない。そういう意味で仰るように、いろんな依存先を増やしていくことが地域で生きることの実現につながっていくと思う。

畠中 川北さんは、強度行動障害だけではなく、知的などの方もみえる、いろんなコミュニティをされている。

川北 すごくコミュニティ像をしっかりと捉えられている。数時間でもルールを説明したり、話し合うっていうのを聞いてすごいと感じた。コミュニケーションをしっかりとることが大切なことと思う。

畠中 川北さんのやられているコミュニティは広がりのあるものでないか。結構、いろんな人がバラバラにみえて、普通にいる。

川北 コミュニティという場はいっぱい創っている。まだコミュニケーションは足りないが…。場を創れているっていうことは大きいことと思う。精神の方とかは、すごく行くのを楽しみにされている。引きこもりの子とかも出てきたりとか、別に何をしているわけでもない。かっこいいことを言ってるわけではない。ただ笑っていて、ウェルカムを大切にされているのかもしれない。それがあって来やすい。安心っていう部分で。存在が安心を醸し出している。

4. 話し合いの記録を基に次の問題を考えていきたい。

「自傷、他害をどのようにとらえるのか」

「強度行動障害を示す人とのコミュニケーションの基本的課題は何か」

「自傷、他害をどのようにとらえるのか」

自傷、他害を示す大川誠さんが生活してきた環境や人間関係などから、「人から、気持ちを受け入れてもらえない歴史があったのではないだろうか。気持ちを対等な人間として、受け入れてもらえない環境で生活を続けていた、そして、コミュニケーションの在りかたそのものが大川さんには、「罰であったのではないだ

うか。」と考えています。

生育歴を見ていると、人を傷つける恐れがあるとの理由で、「生活している部屋に鍵をかけられたり、人間との繋がりを絶たれたりしている人であることがわかります。そのために、困った時などに人を頼ったり、助けを求めたりする経験が少なかったことが想像される。自分で気持ちを調整できない時は、人のいない環境では物、自分の体にストレスによる不満をぶつけることをしていたのではないだろうか。そして、そのような経験を重ねていった結果、人を物のようにとらえ、物への攻撃として、人間へ「他害行為」をしているのではないのだろうか。

実践の経験を重ねてきた大東悠二は、「強度行動障害を示しているというのが本人の出している最大の SOS だと思う。そこに至るまでに、普段のコミュニケーションがうまくいかず、普段の SOS が出せないが、故に最終的に大きな SOS として強度行動障害を示しているのではないか、と思う。」と述べています。

また、野村省吾は「表情が読み取れず、コミュニケーションに失敗し、コミュニケーションがうまくとれていれば、自傷や他害が起こらなくて済んだのに、起こってしまったケースはいっぱい体験している。」コミュニケーションがうまくいかなかった結果としての「自傷、他害行為」をとらえている。

したがって、大川さん、大隅さんの生活してきた環境での人間関係の在り方、さらに一人ひとりのコミュニケーションにおいて、うまくまわりの人たちへ「SOS を出せない」状況から、「自傷、他害行為へ展開したのではないだろうか。」と考えています。

一つの要因としてのストレスの蓄積から「自傷、他害行為」が生まれていると仮定すると、①人間関係②コミュニケーションの在り方を根底から見直すことを考えることが自傷、他害行為を示す人たちとのコミュニケーションを変えていくことにつながるのではないかと考えてみることにした。

以下は①人間関係②コミュニケーションの在り方を根底から見直すことの考察です。

1. 人間のすべての行動には理由がある。

生後間もない1月の乳児と母親のコミュニケーションの研究がある。言葉のない乳児と母親は目と目を見つめ合い、心の距離を縮めながら、表情、目の動き、声体の動きなどをとらえながら、互いにコミュニケーションをしていることが認められた。

そして、乳児が話しているだろうと想定した母親の言葉を軸にして、それに対応する母親の行動は円滑なコミュニケーションとして、成り立っていることを検証した。そのコミュニケーションには、母親の子ども

との命の支え合いがあり、母親の愛を感じる。

人間の行動には理由があることを基本として、コミュニケーションをしていることがみられます。野村省吾は「「こういう思い」「こういう理由」があるから、その行動をするという行動の理由である。①を関係のやりとりに見出ししています。「関係性を築く中で、理由を考えることで、すぐ止めるのではなくて、理解できるようにするのはないか。②」とコミュニケーションの相手の行動の理由をきちんと自分の対応する行動を作るために位置付けている。つまり、理由のある相手の行動を重視して、止めるのではなく、理解しようとしています。

野村と大川誠さんのコミュニケーションは、乳児と母親のやりとりとに相似したものではないだろうか。「強度行動障害の大川さん」として、コミュニケーションしているのではなく、乳児と母親のやりとりのように、人間同士の命の支え合いをしていることが見えてきます。

2. 未来への見通しと信頼関係

施設から地域の生活への移行のビデオの中に、たべることが大好きな大川さんが西野さんと食事をする場面がある。西野さんが、食べ物を小鉢へ少しずつ入れて、向き合いながら、食べている姿が繰り返される。西野さんは「大川さんの表情、動きから「もっと食べたいのだなあ」ととらえている。そして、西野さんからの「ゆっくり食べようね」「楽しんでたべよう」とのメッセージが伝わっているかのように、大川さんの表情が緩み、笑顔が見られる。このコミュニケーションの中に組み込まれているメッセージが互いの余裕を生み出しているように思える。

大川さんは「自分が望んでいる食べ物を食べる」ことが、人を頼ることで実現することを学んだ。そのやりとりの繰り返しの、人と一緒に未来を作り出す「見通し」を体感したのではないだろうか。未来を見通すことで安心し、気持ちが落ち着いてきたと思える。そして、自分の望みをもたらす人への信頼感、関係も作られていくと考えられます。

3. 「話相手へできるだけ、ストレスをかけないコミュニケーションを考える」

コミュニケーションの中でストレスをかけているとすれば、どのようなことを考えていけばいいのだろうかとの話し合いをパンジーのプロジェクトのメンバーがしました。

その記録の中で、大川さんが「冷蔵庫のドアを何回もあける」との話題があった。「やめときましようね」という制止する声掛けが多いことに、みんなが気がついた。なぜ冷蔵庫のドアを何回もあけるのだろうか。

大川さんの気持ちになって考えてみることをしてみよう。そうしたら、「のどが渴いているのかな」「気になるものがあるのかなあ」と、大川さんの気持ちを想定する言葉が出てきました。そして、現実に大川さんへ気持ちに添うような言葉をかけました。そのような言葉かけに変えていくと、大川さんは納得して、冷蔵庫のドアを閉めようになったと報告されています。

大川さんのこだわりがあることもわかってきました。好きなマヨネーズ、おいしい味噌が、こだわりの対象で、それがいいのかを確認したい。そのために冷蔵庫のドアを何回もあけることをする。

大川さんの食べたいと思っている食べ物はどうなのだろうか。彼の思い浮かべている食べ物の世界をメンバーと一緒に楽しんでいるようにも思える。そこには、互いが楽しんだり、笑ったりする余裕が必要なのだろう。大川さんも一緒に笑い、楽しんでもくれる人たちといるのは楽しいと思える。このような経験が人間としての繋がりをつくり、一緒に生きていく基本的な根底を作り出しているように考えている。

まとめにかえて

人間と人間のやりとりは互いの気持ちの行き違い、根底にある生きることの価値観の違い、これまで生きてきた歴史の違い、さまざまな違いがある。

その違いにより、他の人を傷つけたりもしながら、生きています。しかし様々な違いのために、悩み、苦しみもありますが、人間と人間の繋がり根底に信頼をつくり、互いに笑い合える時もあります。

今回の話し合いでは、なかなか通じ合えないコミュニケーションについて考えました。基本になることを考えましたが、「互いが余裕を持ち、一人ひとりの世界を知ること、そして、それぞれが違う世界を楽しめると、つながりを持てる可能性が見えてくることがわかりました。

「やっぱり一人で考えることには限界があって、自分一人ではその人を見て感じることは一通りしかない。その人を知っている職員で見て、行動の理由をいろんな視点で考えることが大切である。ここに10人いれば、それぞれが感じることもあると思うので、関わる人が多いことはプラスになる。」と、西野さんは、コミュニケーションの基本を問題提起されたと思います。人と人が信頼を持ち、繋がるのがさらに「一人ひとりの気持ちを繋げていくことに拮抗すること」に期待できることを実感させてもらいました。

参考資料

東大阪 社会福祉法人 創思苑 DVD 地域で暮らすために
強度行動障害を示す人の可能性をさぐる, クリエイティブ
ハウス・パンジー, 2010.

西野貴善・野村省吾, 東大阪 社会福祉法人, 創思苑, 強度行
動障害を示す人の地域生活の取り組みについて, 三重大学
での協議資料, クリエイティブハウス・パンジー, 2017.

参考文献

1. 独立行政法人国立重度知的障害者総合施設のぞみの園
(2013): 強度行動障害支援初任者養成研修プログラム及
びテキストの開発について. 2-7.
2. 独立行政法人国立重度知的障害者総合施設のぞみの園
(2014): 資料 強度行動障害支援者養成研修のねらい.
強度行動障害支援者養成研修 (基礎・実践研修) 運営の手
引き.
3. 独立行政法人国立重度知的障害者総合施設のぞみの園
(2014): 資料 強度行動障害に関する研究と支援の歴史.
強度行動障害支援者養成研修 (基礎・実践研修) 運営の手
引き.

謝辞

本研究を進めさせていただくことの中で、たくさんの方々にお世話になりました。東大阪の社会福祉法人の創思苑の職員の皆様には、三重大学の教員および学生を温かく迎えていただき、そして、話し合いの場を設けていただきました。深く感謝申し上げます。

また、三重県鈴鹿市で自立生活センター・アーチを運営している畠中忠さん、三重県津市久居で合同会社を運営している「おうとばいとうり」の大東悠二さん、三重県鈴鹿市で居宅介護事業所「そらまめ」を運営している江藤真理さん、三重県津市で居宅介護事業所「スマイル」を運営している川北啓子さんは、研究協議に参加していただき、実践の立場からご意見をたくさんいただきました。感謝申し上げます。教育と福祉の連携で、強度行動障害を考えていくために、特別支援学校の教諭の先生に研究協議に参加していただきました。三重県立玉城わかば学園の小倉泉さん、西日野にじ学園の杉山正敏さんに、自傷・他害行為を示す人の教育の実践を三重大学で話していただきました。ありがとうございました。